

南琉球宮古語の疑問詞疑問係り結び

——伊良部集落方言を中心に——

衣 畑 智 秀

福岡大学

【要旨】 疑問詞疑問専用の係助詞を持つ方言では、その係助詞が文を疑問文化しているのかは一見明らかでない。この問題について、本稿では、南琉球宮古語の伊良部集落方言を取り上げ、この方言では係助詞 *ga* が文を疑問文化していることを示す。この方言では、直接疑問文では疑問詞と係助詞の分布は一致しているが、間接疑問文では分布が異なり、係助詞 *ga* は話し手が節の答えを知らないなど疑問詞節の答えに対する確信度が低い場合にのみ使われる。この疑問詞節の答えを知らないということを疑問文の定義的性質とすると、係助詞 *ga* が疑問文化の機能を担っていると言うことができる。しかし、他の宮古諸方言話者の中には、この係助詞の疑問文化の機能が認められないものもある。ここには、既に形態的な呼応を失っている宮古語の係助詞が、さらに、文のタイプを決めるという係り結びの機能までを失っていくプロセスが観察される*。

キーワード： 係り結び、疑問詞、伊良部集落方言、間接疑問、文のタイプ

1. はじめに

「係り結び」は一般的に、文中に現れる助詞と文末活用形との外形的な呼応を指して使われる。たとえば古代日本語では、ゾ・ナム・ヤ・カといった助詞が現れれば連体形で、コソが現れれば已然形で、文が終止する現象を指している（大概 1897, 船城 1987）。また、琉球諸語の中では、たとえば沖縄首里方言で、通常の終止が (1-a) のように 'junuN'（読む）という形を取るのに対し、(1-b) のように *ga* があれば 'junura'，(1-c) のように *du* があれば連体形の 'junuru' と終止する、形態に呼応のある現象が係り結びと呼ばれる（中松 1973, 内間 1985, Shinzato and Serafim 2013）。

- (1) a. *sjumuçi junuN*. (本を読む。)
b. *sjumuçi^{ga} junura?* (本を読むのだろうか。)

* 本研究は、JSPS 科研費 26770153 の助成を受けている。ただし、調査自体は、話者の善意で成り立っている。言語学の退屈な調査に何度も付き合っていた平良玄輔さん、突然の訪問にもかかわらず快くイラブツを教えて下さった川満恵宏さん、下地方幸さん、そして、伊良部集落以外の宮古語話者のみなさんに感謝したい。本稿の内容は、九州大学（2014年11月22日）及び大阪大学（2014年12月6日、国語研プロジェクト「日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究」第5回研究発表会）における研究会で発表し、貴重なご意見ご教示を賜った。また『言語研究』のお二人の査読者からは、係り結びの定義から現象の解釈に至るまで詳細なコメントを頂いた。衷心よりお礼申し上げたい。

c. *waagadu junuru*. (わたしが読むのだ。) 国立国語研究所(編)(2002: 67-71)

このような形態的呼応を係り結びの定義とすると、係り結びが残っているとされる琉球諸語の中でも、宮古語には係り結びがないことになる。たとえば、宮古西里方言では、係助詞¹と言われる *du* や *ga* に対して、特定の活用形が呼応して終止することはないからである(柴田 1976, 狩俣 1997)²。

- (2) a. *kjuu=ja irau=nkai iki ks-tai*.
 今日=Top 伊良部=All 行く 来る-Past
 「今日は伊良部に行ってきた。」
- b. *kjuu=ja ndza=nkai=ga iki ks-tai*.
 今日=Top どこ=All=Foc 行く 来る-Past
 「今日はどこに行ってきた？」
- c. *kjuu=ja irau=nkai=du iki ks-tai*.
 今日=Top 伊良部=All=Foc 行く 来る-Past
 「今日は伊良部に行ってきた。」

しかし、(2-b) のように係助詞が文を疑問文にしている点、(2-c) のように疑問文に対する答えの焦点を示す係助詞を持つ点は、宮古語も、他の琉球諸語や古代日本語に似ているのである。

現代日本語に失われ、古代日本語や琉球諸語に残るものとして係り結びを位置付けようとする、係り結びは、形態的な観点だけではなく機能的な観点からも定義する必要がある。元より、山田(1936)のように、形態的な係り結びを係助詞の文全体に及ぼす影響力の現れと見る考え方がある³。そこで、本稿では、係り結びを文の中に現れる係助詞が文のタイプを決定するものと考えたい。そうすると、古代日本語でカ・ヤが疑問文に、ゾ・ナムが平叙文に現れるのと同様、宮古語でも、*ga* が疑問文に *du* が平叙文に現れ、文のタイプを決めていると考えられる点で、係り

¹ 本稿では、名詞句がある場合に格標識の後に現れて前には現れない助詞を、係り結びの定義とは関係なく、慣例に従い「係助詞」と呼ぶ(山田 1936)。従って、(2) の *du* や *ga* は格標識 *nkai* の後に現れるので係助詞である。また、現代日本語のハも「[伊良部に]は」のように格標識の後に現れるので係助詞である。しかし、現代日本語のハは、特定の活用形との形態的呼応も、以下で議論する文タイプの決定も行わないため、係り結びは形成しない。

² 以下、用例は、特に断りがなければ、筆者のフィールドワークによって得られたものであり、表記には簡易音声表記を用いる。また、他の文献から用例を引いた場合も、グロスなどは適宜、本文末に付した略号一覧に従って改めている。なお、(2) の例は、1937年生の女性によるものであり、彼女によると、(2-a) は *du* がある方が普通であるという。

³ ただし、山田(1936)は、係助詞の文全体に対する影響を、文を「陳述をして終止する」(p. 476)ものと解釈しており、ここでの考えとは異なる。山田(1936)の考え方では、文タイプを決定しない現代日本語のハ、モ、サエ、デモなども係り結びを形成するものとなってしまう。

結びを認めることができる⁴⁵。

しかし、このように係り結びを文のタイプを決定するものと見る場合に問題となるのが、疑問詞疑問文で使われる係助詞である。疑問詞疑問文では、定義的に必ず疑問詞が使われる。だとすると、たとえば、(2-b)のような疑問文で文のタイプを決めているのは、疑問詞の *ndza* (どこ) だと考えることもできそうに思われる。もし疑問詞の *ndza* が文のタイプを決めているならば、これらの文で *ga* は文のタイプを決定する役割を果たしていないことになる。宮古語では、このように *ga* は疑問詞疑問にのみ見られるので、*ga* は単に疑問詞(句)に付くだけで、文を疑問文化するという機能は形骸化しているとも考えられる。

このような、疑問詞疑問文における係助詞機能の形骸化の問題は、何も琉球諸語に限られるものではない。たとえば、日本語史においても、奈良時代には、カによる係り結びは肯否疑問でも疑問詞疑問でも使われ、カが文を疑問文にし、文のタイプを決めていたと見られる。

- (3) a. 名張の山を今日か(香)越ゆらむ(万葉43) 肯否疑問
b. いくにか(可)船泊てすらむ(万葉58) 疑問詞疑問

しかし、平安時代になると、カは疑問詞疑問文でしか使われなくなる(此島 1966, 阪倉 1975, 衣畑 2014)。

- (4) 年齢は幾つにかものしたまひし。(源氏・夕顔) 疑問詞疑問

このような疑問詞疑問でしか使われないカは、文を疑問文化するという係り結びの機能面を維持していたのだろうか。それとも、この係り結びを引き起こしていたのは、助詞のカではなく、「ひも鏡」が整理するように疑問詞の「何」であり(本居 1771)、カは形骸的に疑問詞句に付いていたにすぎないのだろうか。

平安時代語においては、しかし、カは文末で肯否疑問にも使われていた。よって、平安時代の助詞カそのものについては、疑問文化の機能を認めることができるだろう。しかし、係助詞であれ、文末助詞であれ、*ga* と *ru* が疑問詞疑問と肯否疑問で区別して使われるような宮古伊良部方言では、疑問詞疑問専用の *ga* に文を疑問文

⁴ ただし後述するように、宮古語の中にも係助詞が *du* のみになり、文タイプとの呼応が認められないため、係り結びを持たない方言もある。このように係助詞が疑問文と平叙文の区別を失い *du* のみに統合される傾向は、八重山語の諸方言に顕著なようである(伊豆山 2002, Aso 2010, かりまた 2011 ほか)。ただし、これらの方言は文末との形態的呼応は保っており、その点は宮古語と異なる。他方、北琉球諸語は、大凡疑問文に *ga*、平叙文に *du* が使われるといった文タイプによる区別があり、機能的な定義からも係り結びが認められる(内間 1985)。ただし、奄美語には疑問詞疑問に *ga*、肯否疑問と平叙文に *du* を用いるなど係助詞と文タイプに一部ズレが見られる方言もあるようである(上村・須山 1997, Niinaga 2010)。

⁵ かりまた(2011)は、主に形態的な観点から琉球諸語に係り結びを認めない立場であるが、*du* や *ga* といった係助詞が特定の「文の通達的なタイプ」に現れることを認めている(p. 79)。このような特定の文のタイプにしか現れない(つまり *du*、*ga* が現れれば必ず特定の文タイプになる)ことを、本稿では係り結びとしているのである。

化する機能を認めることができるのだろうか。

(5) 疑問詞疑問

- a. *mma=a noo=ju=ga jummi bui?*
 祖母=Top 何=Acc=Foc 読む Cont
 「おばあは何を読んでいるの？」
- b. *ndza=nkai=ga icci bu-taa?*
 どこ=All=Foc 行く Cont-Past
 「どこに行ってたの？」

(6) 肯否疑問

- a. *mma={a=ru sooc=cu asi-taa?*
 祖母=Nom=Foc 掃除=Acc する-Past
 「おばあが掃除したの？」
- b. *ja=a aca irav=nkai ku-n=maa=ru?*
 2Sg=Top 明日 伊良部=All 来る-Neg=SFP=Q
 「あなたは明日伊良部に来ないの？」 伊良部島伊良部

このように疑問詞疑問専用の係り形式がある場合、それが文のタイプを決める機能を果たしているのか、疑問詞に付随して使われているだけなのかは、(5)のような例を見ても分からない。この問題に対し本稿では、(5)のような直接疑問文だけではなく、埋め込み節における係助詞の振る舞いも見ることにより、係助詞に文を疑問文化する機能があるかないかを確かめることができることを示す。結論だけを先に言えば、(5)の伊良部集落方言の *ga* は文を疑問文化する機能を持っており、上で述べた意味での係り結びが生きているのである。

以下、本稿は次のように構成される。まず2節では、本稿で取り上げる集落について述べ、関連する研究に触れる。続いて3節では、伊良部集落方言の係り結びについて記述し、係助詞 *ga* に文を疑問文化する機能があることを示す。4節では、この *ga* の機能が、宮古諸方言で弱まりつつあることを示して係り結びの衰退について議論し、5節をまとめとする。

2. 宮古語伊良部島方言

宮古語は、沖縄本島から南西に約 280 キロメートルにある宮古諸島で話される言語であり、八重山語、与那国語とともに、南琉球諸語の一つに数えられる。また、南琉球諸語と沖縄・奄美などで話される北琉球諸語は一つのグループを成し、日本語本土諸方言とは、奈良時代より前に分岐したと見られる(服部 1959, ベラル 2012)。主要部を後置し膠着的な接辞法を持つなど、宮古語の形態統語的特徴は日本語とよく似ている。

本稿では宮古諸島で話される方言群のうち、宮古島及び伊良部島で話される諸方言のデータを扱う。表 1 に本稿で調査を行った集落名を、かつての行政単位に分け

て示す。現在は全て合併し沖縄県宮古島市となっている。

表1 調査集落

島名	旧行政区域	集落名
宮古島	旧平良市	狩俣, 島尻, 大浦 (北部) 下崎, 荷川取, 松原 (中南部)
	旧下地町	上地, 与那覇, 洲鎌
	旧上野村	新里, 野原
	旧城辺町	新城
伊良部島	旧伊良部町	伊良部, 佐和田, 佐良浜

表1の集落のうち、次節で考察の中心となるのが伊良部島の伊良部集落の方言である。伊良部島は宮古島の北西に位置し、伊良部、仲地、国仲、長浜、佐和田、池間添、前里添の七つの集落から成っている。このうち、島東部に位置する池間添・前里添(佐良浜)は池間島からの分村であり、池間方言に属する。他の五つの集落は島の西部で隣接しているが、方言差は小さくなく、伊良部・仲地、国仲、佐和田・長浜の三つの方言に区分される(狩俣1997, Shimoji 2008, 富浜2013)。

これら三つの方言のうち佐和田・長浜方言については、下地理則氏によって大部の文法書が書かれ(Shimoji 2008)、最も文法記述が進んでいると言える。下地(2009)によると、長浜方言では構文タイプによって異なる係助詞が現れ、(7)のように、平叙文で *du*、肯否疑問文で *ru*、疑問詞疑問文で *ga* が使われ、命令文で係助詞は現れない。

- (7) a. *pʒsara=nkai=du ikii t-tar.*
 平良=All=Foc 行く 来る-Past
 「平良へ行ってきた。」
- b. *pʒsara=nkai=ru ikii t-tar(=ru)?*
 平良=All=Foc 行く 来る-Past(=Q)
 「平良へ行ってきたの?」
- c. *nza=nkai=ga ikii t-tar(=ga)?*
 どこ=All=Foc 行く 来る-Past(=Q)
 「どこへ行ってきたの?」
- d. *pʒsara=nkai(*=du) ikii kuu.*
 平良=All(=Foc) 行く 来る.Imp
 「平良へ行ってこい。」

(下地2009: 91-92)

この係助詞の分布は次節で記述する伊良部集落方言と共通するものであるが、疑問詞疑問専用の *ga* が (7-c) で文を疑問文にする機能を持っているのかという、前節でみた問題は依然残されている。

伊良部・仲地方言については、これまで動詞活用が記述されたり（平山他 1967, 名嘉真 1992）、助詞の文例が取り上げられる（野原 1986）ことはあったが、まとまった研究は見られなかった。しかし、2013年に仲地出身の富浜定吉氏によって、宮古諸方言では初めてとなる大部の辞書が編纂され（富浜 2013）、今後の研究の進展が期待されている。この辞書には、音韻・文法の記述も含まれるが、文法は動詞、形容詞、助動詞、人称代名詞の語形変化を載せるのみで、係り結びについての記述は見られない。そこで次節では、伊良部島の伊良部集落の係助詞について記述を行い、この方言で使われる疑問詞疑問専用の *ga* に文を疑問文化する機能が生きていることを示したい。

3. 伊良部集落方言の係り結び

3.1. 係り結び——主節における——

伊良部集落方言⁶における係助詞は、近隣の長浜方言と同じく、平叙文に *du* が、肯否疑問文に *ru* が、疑問詞疑問文に *ga* が使われる。係助詞の *du*, *ru*, *ga* は文の焦点の位置に現れ、(8-a) は (8-b) (8-c) に対する答えの関係になっている。係助詞が使われない例 (8-d) とともに以下に示す。

- (8) a. *pisara=nkai=du icci t-taa.*
 平良=All=Foc 行く 来る-Past
 「平良に行ってきた。」
- b. *pisara=nkai=ru icci t-taa?*
 平良=All=Foc 行く 来る-Past
 「平良に行ってきたの？」
- c. *ndza=nkai=ga icci t-taa?*
 どこ=All=Foc 行く 来る-Past
 「どこに行ってきたの？」
- d. *pisara=nkai icci t-taa.*
 平良=All 行く 来る-Past
 「平良に行ってきた。」

(8-d) と (8-a) (8-b) (8-c) の文末を見比べれば分かるように、この方言も、他の宮古諸方言と同じく係助詞が特定の文末活用形を要求することはない。よって、形態的な観点から、この方言に係り結びを認定することはできない⁷。

⁶ 本稿で用いる伊良部集落方言のデータは、1930年生まれ男性への聞き取り調査から得られたものである。そこで得られたデータ及び富浜（2013）から、伊良部集落方言には5つの母音 /i, i[^hi ~ ^hi ~ ^hi], u, o, a/ と18の子音 /p, t, k, h[h], b, d, g, ŋ, c[ts ~ tɕ], dz[dz ~ z], f, s[s ~ ɕ], m, n, r[r], w, v[v ~ ʋ], j/ があると仮定し、この方言の用例を音韻表記する。

⁷ ただし、Shimoji（2011）が長浜方言で‘Quasi-Kakarimusubi（擬係り結び）’と呼ぶ現象は本方言にも存在する。この現象は、焦点の *du* が「m 語尾終止形」とは共起しないというもので

しかし、この方言でも長浜方言と同様に、係助詞は特定の構文タイプで用いられていると言うことはできる。*ru* と *ga* が用いられるのは疑問文のみであり、また、*du* も (9) のような命令文で用いることができず、平叙文でのみ用いられる。

(9) (何時に行けばいいか聞かれて)

nidzi=n(=du) kuu.*
 二時=Dat(=Foc) 来る.Imp
 「二時に来い。」

よって、これらの助詞が構文タイプの決定に影響を及ぼしていると考えることができる。

平叙文や肯否疑問文は、文の一部が焦点とならないことがあり、その場合は係助詞の *du* や *ru* が用いられない。他方、疑問詞疑問は、定義的に疑問詞が焦点となるため、疑問詞疑問文には必ず焦点部分が存在する。そのような性質を持つ疑問詞疑問文においては、この方言では必ず *ga* が用いられ、脱落することはほとんどない⁸。次の諸例を見られたい。

- (10) a. *ndzju=u=ga faa?*
 どれ=Acc=Foc 食べる.Vol
 「何を食べる？」
- b. *ifuci=n=ga nai-taa?*
 いくつ=Dat=Foc なる-Past
 「(年齢は)いくつになった？」
- c. *ndza=nkai=ga icci bu-taa?*
 どこ=All=Foc 行く Cont-Past
 「どこに行っていた？」
- d. *cigja=a ici=ga koo?*
 次=Top いつ=Foc 来る.Vol
 「次はいつ来る？」
- e. *noositii=ga cimo=o idii bui?*
 なぜ=Foc 心=Top 出る Cont
 「どうして怒っているの？」

あり、これは、m 語尾終止形が述語が焦点であることを示すため、項を焦点化する *du* が現れないものと説明される。このような機能的な観点からの焦点標識と文末形式の共起／非共起は、Takubo and Hayashi (2010) によると池間方言にも見られるという。

⁸ 2015年8月22日、10月31日、11月3日の調査では、標準語を方言に直す形で直接疑問文を34種104回発話してもらったが、以下に述べる形態的音韻的条件によって *ga* 現れない場合以外(28種85回)で、*ga* が脱落することは一度もなかった。調査中に *ga* の脱落が見られたのは、3.2節の表3の「いつ」の行にあるA.欄とB.欄のもののみであった。

疑問詞疑問にも関わらず係助詞 *ga* が用いられないという例外は, [aa] もしくは [aʃa] という音連続に続く場合である。たとえば, (11-a) の ‘ndza=haa (どこから)’, (11-b) の ‘ta=ʃa (誰が)’ などの疑問詞句の後には, 係助詞 *ga* の出現が期待されるが, それと分析できるものは出現しない。

- (11) a. *ndza=haa t-taa?*
 どこ=Abl 来る-Past
 「どこから来たの?」
- b. *ta=ʃa mucci t-taa?*
 誰=Nom 持つ 来る-Past
 「誰が持ってきた?」

これはこの方言の形態音韻論的な理由によるものであり, 疑問の *ga* でなくても, 長音 [aa] の後に [ga] という音節は現れない⁹。たとえば, 主格の *ga* は, [a] 以外の後には (12-a) のように [ga] として現れ, [a] の後では (12-b) のように /g/ が [a] に挟まれて咽頭摩擦音化するが¹⁰, (12-c) のように長音 [aa] の後には全く現れない。(12-d) のように指小辞 *gai* を付けた場合もまた /ga/ の部分は現れない。

- (12) a. *takasi=ga=du t-taa.*
 タカシ=Nom=Foc 来る-Past
- b. *kana=ʃa=du t-taa.*
 カナ=Nom=Foc 来る-Past.
- c. *isamigaa=du t-taa.*
 イサミガー=Foc 来る-Past
- d. *isamigaa + gai → isamigaa-i*

[ʃa] の連続が想定される場合には, (11-b) の疑問の *ga* 以外にその例を未だ見いだせていないが, (12-c) (12-d) で /ga/ が [ʃa] として現れないのは, [ʃa] が音韻的には母音単独音節として扱われ, 長音が3モーラ以上続くことができないためであると思われる。すると, [aʃaʃa] という音連鎖も3モーラの長音となり許されないため, (11-b) のように係助詞 *ga* が現れないのだろう。

しかし, 以上のような形態音韻的環境によって制限される場合を除いては, 係助詞 *ga* は (10) のように義務的に現れると言える。

⁹ ただし, ‘obaa=ga (おばあが)’ のように借用語の後では, この規則は必ずしも当てはまらないようである。

¹⁰ この咽頭摩擦音化は語中でも起こっている。比較のために富浜 (2013) に挙げられた長浜方言の例を括弧に入れて示す。kaʃam (鏡, kagam), aʃai (東, agal), naʃasa (長さ, nagasa), maʃai (曲がる, magal), batarjaʃan (ワタリガニ, batarjagan), paʃani (鋼, pagani)。

3.2. 埋め込み節における係り結び

その定義から明らかなように、疑問詞疑問文には必ず疑問詞が現れる。また (10) に示したように、伊良部集落方言で *ga* が脱落することは、特殊な形態音韻的環境を除いてほとんどない。よって、この方言においては、疑問詞と係助詞 *ga* の分布はほとんど重なるように見える。だとすると、この方言においては、*ga* の機能を疑問詞と独立に考えることはできないのだろうか。

そこで、係助詞 *ga* の分布を調べるために、(10) のような直接疑問文だけでなく、疑問詞のある節（以下「疑問詞節」）が動詞の項となる、いわゆる間接疑問において、*ga* がどのように振る舞うかを考えることにする。この方言において、疑問詞節が動詞の項となる場合、(13) のように *gara* という形式によって節が示される¹¹。以下埋め込まれた節を [] を付けて示す。

- (13) a. *abaa* [*ta=ʕa sooc=cuba asi-taa*]=*ra* *sa-n*.
 1Sg.Top 誰=Nom 掃除=Acc.Top する-Past=Q 知る-Neg
 「私は誰が掃除したのか知らない。」
- b. *abaa* [*obaa=ga noositii=ga cimo=o idii bui*]=*gara* *sa-n*.
 1Sg.Top 祖母=Nom なぜ=Foc 心=Top 出す Cont=Q 知る-Neg
 「私はおばあがなぜ怒っているのか知らない。」

また、主語の人称や述語の種類によっては、引用形式に当たる *tii* が用いられることもある。次に例を挙げる。

- (14) a. *ja=a* [*ici=ga fui kutu*]=*tii=ja* *sidzi=ru bui?*
 2Sg=Top いつ=Foc 来る こと=Quot=Top 知る=Foc Cont
 「あなたは、(あの人が)いつ来るか知っている？」
- b. *abaa* [*ndza=nkai=du pidzi bui*]=*tii=ja* *sidzi=du bui*.
 1Sg.Top どこ=All=Foc 行く Cont=Quot=Top 知る=Foc Cont
 「私は、どこに行っているか知っているよ。」

引用表現としての *tii* の用例は、次に示される通りである。

- (15) *obaa=ja* *pisara=nkai ici* *bussa=tii=du* *nci* *bu-taa=doo*.
 祖母=Top 平良=All 行く Des=Quot=Foc 言う Cont-Past=SFP
 「おばあは平良に行きたいって言ってたよ。」

¹¹ (13-a) の下線部は、*gara* が長音 [aa] に付いたため /ga/ が現れていない。この *gara* に関しては、元は疑問の助詞 *ga* にコピュラ動詞 **ari* の推量を表す形 **ara* が付いたものと思われるが、*gara* の形でのみ使われ活用はしない。このような不確定な要素を示す形式が疑問の助詞とコピュラ動詞から成ることは、例えば奄美湯湾方言にも見られ (Niinaga 2010: 55)、琉球諸語に広く確認できる（査読者の一人からの指摘）。Shimoji (2008) によると、長浜方言には伊良部集落方言には見られない *gagara* という形も見られるが、これは一旦 *gara* が成立して疑問の助詞 *ga* を含むという語源が忘れられたあと、更に *ga* が加わったものだろう。

gara, tii のどちらが使われても、埋め込まれた節に疑問詞があるためにそこが焦点となり、(13-b) (14) のように、係助詞の *ga* や *du* が疑問詞句の後に現れる。特に *du* が現れる (14-b) は、疑問詞の分布と *ga* の分布が異なることを示唆している点で重要である。それでは *ga* はどのような節に分布しているのだろうか。

このことを確かめるために、本稿では間接疑問における主節の主語と述語を入れ替えて複数のパターンを作成し、そこに埋め込まれる節に *ga* がどのように現れるかを観察した。本稿で作成したパターンは以下の五つである。ここでは「誰が来るか」を埋め込んだもので例示する。

- (16) A. 私は「誰が来るか」知らない。
 B. あの人は「誰が来るか」知らない。
 C. あなたは「誰が来るか」知っている？
 D. あの人は「誰が来るか」知っている。
 E. 私は「誰が来るか」知っている。

(16) の述語の違いは、藤田 (1997) の「未決」「対処」「既決」という間接疑問文の述部の分類に基づいている。A.B. の「知らない。」は「未決」と呼ばれるもので、主語の人物が疑問詞節に対する答えを持ち合わせていない。反対に D.E. の「知っている。」は、「既決」と呼ばれ、主語の人物が答えを持ち合わせている。藤田 (1997) は、疑問詞節への答えを「未決から既決の方向へ推し進めよう」(p.157) とする「対処」をこの二つの中間に置き、「考える」「明らかにする」などの述語を挙げているが、本稿では、主語が答えを知っているとも知らないとも言えない疑問の形を C. として、A.B. と D.E. の間に置いた。

以上の区別に加え、「未決」「既決」については、主語が一人称のものと三人称のものを提示した。これは直接疑問文との関係を考慮してのものである。前節 (10) のような直接疑問文では、話し手は疑問文に対する答えを知らない。係助詞の *ga* が (10) のように元々主節で使われるものならば、埋め込み節においても、話し手が答えを知らないことを明示している A. の方が、そうではない B. よりも使われやすいと考えられる¹²。また反対に、話し手が答えを知っていることを明示している E. は、D. に比べてより使いにくいことが予想される。C. については、方言話者が疑問文を発話する状況が想定しやすい二人称を主語とした。

以上をまとめると、次の図 1 のようになる。

¹² 日本語の歴史においては、直接疑問文から派生したカによる間接疑問文が、中世から近世後期まで一人称主語で「未決」の述語に偏り、話し手が答えを知らない場合にのみ使われたことが Kinuhata (2012) により明らかにされている。

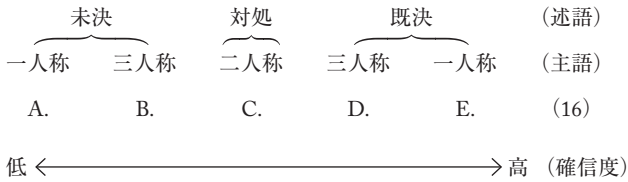


図1 疑問節の答えに対する確信度

A. ~ E. の配列は, E. に行くに従って, 疑問詞節に対する答えを知らないという直接疑問文の特徴から離れていくと考えることができる。A. は主語 = 話し手は答えを知らない。B. は話し手が答えを知らないことは明示されていないが, 未決の述語を持ち, 主語の人物は答えを知らない。C. は答えを知らない / 知っているに対するバイアスがない。D. は既決の述語を持ち主語の人物は答えを知っているが, 話し手については明示されていない。E. は主語 = 話し手が答えを知っている。このような疑問詞節の答えに対するバイアスを, 本稿では「確信度」と呼ぶ。話し手が答えを知らない / 知っているを明示している A.E. を両端に, 述語によるバイアスによって B.C.D. が配置されるわけである。

調査では, (16) の五つのパタンの埋め込み節部分に, 次の六つの文を埋め込んだ日本語の文を提示し, それを方言に直してもらおうという形で行った¹³。

- (17) a. 誰が掃除したか
 b. 祖母が何を讀んでいるか
 c. この車がどこに向かっているか
 d. Kさんがいつ来るか
 e. 子供達がどれを頼んだか
 f. 祖母がなぜ怒っているか

(17) の六つの文は, 太字で示したように, それぞれに使われる疑問詞を変えて作成した。

以下に, (17-b) を埋め込んだ結果得られた方言の文例を (16) の A. ~ E. のパタンの順に示す。以下本論文においては, 用例の先頭に大文字で書かれた A.B.C.D.E. は, (16) のそれに対応している。

- (18) A. *abaa* [*mma=ʃa noo=ju=ga jummi but*]=*gara sa-n*.
 1Sg.Top 祖母=Nom 何=Acc=Foc 読む Cont=Q 知る-Neg
 「私はおばあが何を讀んでいるか知らない。」

¹³ 調査は2014年8月22日, 10月31日, 11月3日の三回に分けて他の調査とともにを行い, 話者に調査の意図は知らせなかった。最初の調査では (17-a) (17-b) を埋め込んだ文, 二回目の調査では (17-c) を埋め込んだ文, 三回目の調査では (17-d) (17-e) (17-f) を埋め込んだ文を尋ねた。なお, (17-f) を (16) の E. に埋め込んだ文は, この時の調査では疑問詞を使った文が得られなかったので, 2015年3月27日に行った追加調査で確認した。なお, (16) の文は, A.→C.→B.→D.→E. の順で提示した。

- B. *mma=a [jarabi-taa noo=ju=ga jummi bui]=gara sa-n*
 祖母=Top 子供-Pl 何=Acc=Foc 読む Cont=Q 知る-Neg
noo-ham.
 Evid-Acop
 「おばあは子供たちが何を読んでいるか知らないらしい。」
- C. *ja=a [mma=sa noo=nu hun=nu={du/ga} jummi bui]=tii=ja*
 2Sg=Top 祖母=Nom 何=Gen 本=Acc=Foc 読む Cont=Quot=Top
sidzi=ru bui?
 知る=Foc Cont
 「あなたはおばあが何を読んでいるか知っている？」
- D. *uja ja=tigaa [mma=sa noo=ju=du jummi bui]=tii=ja*
 父 Cop=Cond 祖母=Nom 何=Acc=Foc 読む Cont=Quot=Top
sidzi=du bui=padzi.
 知る=Foc Cont=Conjec
 「お父さんだったらおばあが何を読んでいるか知っているはずだ。」
- E. *abaa [mma=sa noo=ju=du jummi bui]=tii=ja sidzi=du*
 1Sg.Top 祖母=Nom 何=Acc=Foc 読む Cont=Quot=Top 知る=Foc
bui=suga ndzi taf=fa nii-n.
 Cont=Conces 言う Des=Top ない-Neg
 「私はおばあが何を読んでいるか知っているけど、言いたくはない。」

(18) からは、先に見た埋め込み節を標示する *gara* や *tii*、そして係助詞の *ga* や *du* の分布を大凡読み取ることができる。すなわち、A. や B. のように、疑問詞節に対する答えの確信度が低い場合には *gara* が使われ、反対に、D. や E. のように確信度が高い場合には *tii* が使われる。また、係助詞も確信度が低い A.B. では *ga* が現れるが、確信度が高い D. や E. では、平叙文でも使われる *du* が現れる。C. の係助詞は *ga* と *du* で揺れている。

以上のような傾向は (17-b) を埋め込んだ場合に偶然見られたものではない。表 2 に、(17) のそれぞれを埋め込んだ場合に使われた埋め込み節の標識を示す。表の縦軸は (17) の諸例に対応している。横軸は、(16) の A. ~ E. に対応している。

表 2 埋め込み節の標識

	A.	B.	C.	D.	E.
誰が	<i>gara</i>	<i>gara</i>	<i>tii</i>	<i>tii</i>	<i>tii</i>
何を	<i>gara</i>	<i>gara</i>	<i>tii</i>	<i>tii</i>	<i>tii</i>
どこに	<i>gara</i>	<i>gara</i>	<i>tii</i>	<i>tii</i>	<i>tii</i>
いつ	<i>gara</i>	<i>tii</i>	<i>tii</i>	<i>tii</i>	<i>tii</i>
どれを	<i>gara</i>	<i>gara</i>	<i>tii</i>	<i>tii</i>	<i>tii</i>
なぜ	<i>gara</i>	<i>gara</i>	<i>tii</i>	<i>tii</i>	<i>tii</i>

たとえば(18)のA.B.C.D.E.で使われた標識は、「何を」の行に示されている。先にも述べたように、答えに対する確信度の低いA.B.では *gara*、確信度が上がるC.D.E.になると *tii* が使われるが、その傾向はどの節を埋め込んだ場合にも見られる。

次に、係助詞についてもその分布が偶然でないことを見る。表3の縦軸・横軸は、表2に同じものであり、その交差するところに使用された係助詞を示す。文が複数回発話され、係助詞が異なっていた場合は ' ' によって併記し、' ' の左側が右側よりも多く発話されたことを意味する。 ϕ は係助詞がないことを意味し、「誰が」の行は3.1で見た形態音韻的理由で *ga* が現れていない((11-b)参照)。

表3 埋め込み節における係助詞

	A.	B.	C.	D.	E.
誰が	ϕ	ϕ	ϕ	<i>du</i>	<i>du</i>
何を	<i>ga</i>	<i>ga</i>	<i>du/ga</i>	<i>du</i>	<i>du</i>
どこに	<i>ga</i>	<i>ga/du</i>	<i>du</i>	<i>du</i>	<i>du</i>
いつ	<i>ga/\phi</i>	<i>du/ga/\phi</i>	<i>ga</i>	<i>du</i>	<i>du</i>
どれを	<i>ga</i>	<i>ga</i>	<i>du/ga</i>	<i>du</i>	<i>du</i>
なぜ	<i>ga</i>	<i>ga</i>	<i>du</i>	<i>du</i>	<i>du</i>

(18)における係助詞の使用は「何を」の行に示され、先にも述べたように、A.B.では *ga*、D.E.では *du*、C.は *ga* と *du* が用いられている。この確信度が低い場合には係助詞 *ga* が使われ、高くなるにつれて *du* が用いられやすいという傾向はどの節を埋め込んだ場合にも見られる。よって、係助詞の *ga* と *du* は、疑問詞節の答えに対する確信度の違いによって使い分けられているということが出来る¹⁴。

以上のような一般的な傾向を押さえた上で、さらに表3を解釈してみたい。表3では、A.に行くほど *ga* が、E.に行くほど *du* が用いられるとはいえ、綺麗に対称をなしているわけではない。すなわち、D.E.については例外なく *du* が用いられるのに対し、B.では *ga* に混ざって *du* が使われている。このことは、どのような視点から疑問詞節を捉えるかということから説明ができる。まず、A.とE.は、脱落を除けば、それぞれ *ga* と *du* が例外なく使われている。これは、A.は話し手が疑問詞節に対する答えを知らないことを明示し、E.は話し手が答えを知っていることを明示しているためであると考えられる。次にB.とD.に関しては、D.に例外なく *du* が用いられるのに対し、B.では *ga* に混ざって *du* も見られる。B.とD.は、主節の主語の視点から見れば、前者が答えを知らず、後者が答えを知っているため、それぞれ *ga* と *du* が分布する。しかし、話し手の視点から見ると、B.もD.も「あの人は～知らない／知っている」という他人の知識を記述している文にすぎないとも

¹⁴ 係助詞 *ga*、*du* の分布について、他の伊良部集落方言の話者を調査したところ、1924年生まれの話者からは、表3と同様の結果が得られたが、1941年生まれの話者はA.～E.の全ての場合に *ga* を使った文で答えた。4節での検討と合わせて考えれば、伊良部集落方言においても、若い世代で埋め込み節における *ga*、*du* の使い分けが失われている可能性が高い。

言える。よって、B. や D. で、たとえ話し手が答えを知らなかったとしても、話し手の疑問を表現する文ではないので、話し手の視点から *ga* が使われることはなく、よって *du* が使われる。それ故、D. では、主節の主語の視点からも話し手から見た他人の知識の記述という点でも *du* が選択されるのに対し、B. では、主節の主語の視点から *ga* が使われることが多いが、他人の知識の記述として *du* が使われることもあるのだと考えられる¹⁵。

3.3. 係助詞 *ga* の分布

3.2 節で見たように、話し手や主語の人物が答えを知らないなど、確信度が低い場合に *ga* は埋め込み節で使用できる。間接疑問標識の *gara* も確信度の低い A.B. に分布するが、表 2 と表 3 を見比べれば分かるように、*ga* と *gara* の分布は必ずしも一致しておらず、両者は呼応関係にあるわけではない。よって、*ga* の分布は *ga* の機能の結果であると解釈される。

さらに、*ga* は、埋め込み節を示す *gara* と異なり、主節において直接疑問文にも使用され (3.1 節)、この直接疑問文も、基本的に話し手が答えを知らない場合に使われるものである¹⁶。よって、主節・埋め込み節における節の性質と、係助詞・疑

¹⁵ B. の *ga* と *du* の分布は、話し手が答えを知らない／知っている、によるのではない。筆者は当初、表 3 をそのように解釈していたが、査読者の一人の提案に沿い、B. の文に関して「私は知っているけど」という前提とともに発話してもらったところ、(i) のように *du* が現れることもあったが、(ii) のように *ga* が現れることもあった。

(i) *abaa sidzi=du bui=suga, obaa=ja ici=du fui=tii=ja*
1Sg.Top 知る=Foc Cont=Conces 祖母=Top いつ=Foc 来る=Quot=Top
sa-n=padzi=do.
知る-Neg=Conjec=SFP
「私は知っているけど、おばあは(Kさんが)いつ来るか知らないらしい。」

(ii) *abaa sidzi bui=suga, jarabi-taa obaa=ga noositii=ga cimo=*
1Sg.Top 知る Cont=Conces 子供-Pl.Top 祖母=Nom なぜ=Foc 心=Top
idii bui=gara sa-n.
出る Cont=Q 知る-Neg
「私は知っているけど、子供たちはおばあがなぜ怒っているのか知らない。」

(ii) は、話し手が答えを知らない場合にのみ *ga* が使われるとは言えないことを示している。本稿の考えでは、(i) は他人の知識の記述として *du* が使われ、(ii) は主節の主語の視点から *ga* が使われていると説明できる。この調査の重要性を指摘下さった査読者には感謝したい。

¹⁶ ただし、クイズを出すような場合には、話し手は答えを知っていることになるが、このような場合は *ga* が使えるようである。つまり、クイズを出すような場合は (i) のように言うのが普通であるが、(ii) のようにも言えるようである。

(i) *abaa ndza=n=du ici bu-taa=tii sidzi bum=mo?*
1Sg.Top どこ=Dat=Foc 行く Cont-Past=Quot 知る Cont=Q
「私がどこへ行ったら分かるか？」

(ii) *abaa ndza=n=ga ici bu-taa? abasi miiru.*
1Sg.Top どこ=Dat=Foc 行く Cont-Past 当てる みる.Imp
「私はどこへ行ったら? 当ててみる。」

問詞の分布をまとめると大凡次の図2のようになる。

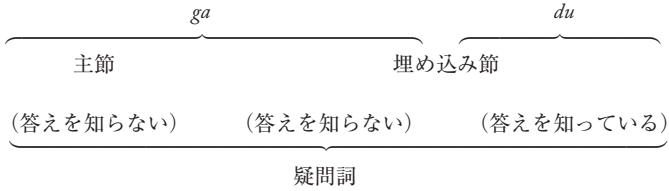


図2 係助詞 *ga* の分布

図2に示すように、疑問詞自体は節の性質に関係なく分布するのに対し¹⁷、*ga*の生起は節の性質と依存関係にある。この依存関係は、係助詞 *ga* が現れれば、(話し手は) その疑問詞節の答えを知らないというものである。この「答えを知らない」ということを、疑問文の定義的性質であるとする、*ga* が使われれば必ずその文は疑問文になるといったように、*ga* には文の疑問文化の機能を認めることができる。このように、*ga* は文のタイプを決定する役割を果たしており、この方言には本稿で定義した意味での係り結びが生きているのである。

4. 宮古諸方言の係り結び

4.1. 諸方言の記述

前節では、宮古伊良部集落方言において、*ga* が文を疑問文化する役割を持ち、本稿で定義する係り結びが機能していることを見た。しかし、全ての宮古諸方言において、係助詞 *ga* が同様の機能を持っているわけではない。ここではまず、宮古諸方言で係助詞の *ga* がどのように使われるかを概観する¹⁸。

また、修辞疑問の場合も話し手は答えを知っていることになる(下地理則氏個人談)が、この場合も *du* ではなく *ga* が使われる。

- (iii) *isi=nu kutu=u noo=nu={ga/*du} umussi-kaa!*
 Dem=Gen こと=Acc 何=Nom=Foc 面白い-Acop
 「そんなことをして何が面白いか! (何も面白くない)」

(ii) や (iii) の例が示しているのは、疑問詞節における *du*、*ga* の使用について、話し手の知識以外に主節であるか否かも効いているということである。ただし、主節における直接疑問文では、多くの場合話し手が答えを知らずに聞くのが普通であると考え、図2のように一般化しておく。

¹⁷ *noo* (何), *taa* (誰), *ndza* (どこ), *ici* (いつ) などは疑問文の形成にかかわらないという本稿の趣旨からすると、これらを「疑問詞」と呼ぶのは適切ではなく、単に文における不確定部分を表すものとして、「不確定代名詞 (indeterminate pronoun)」(Kuroda 1979) などと呼ぶ方が誤解を与えないかもしれないが、術語の定着度を重視し、本稿では「疑問詞」という用語を用いた。

¹⁸ 本節で扱うデータは2009年10月から2014年2月にかけて行った筆者のフィールドワークによる。用例の表記には簡易音声表記を用いる。

4.1.1. 新里方言

この方言では、3節で見た伊良部集落方言と同様、埋め込み節内で、*ga* と *du* が使い分けられる。その使い分けの傾向も伊良部集落方言と同様であり、(19) A.B. のように疑問詞節の答えに対する確信度が低いと *ga* が、(19) D.E. のように確信度が高いと *du* が使われる。次に1927年生まれの話者のデータを挙げる。

- (19) A. *ba=ja* [*tau=ga=ga* *saudzi si-taa*]=*gara ssa-n*.
 1Sg=Top 誰=Nom=Foc 掃除 する-Past=Q 知る-Neg
 「私は誰が掃除したか知らない。」
- B. *kanu sjuu=ja* [*tau=ga=ga* *saudzi si-taa*]=*gara*
 Dem.Gen 祖父=Top 誰=Nom=Foc 掃除 する-Past=Q
ssa-n=padzi=doo.
 知る-Neg=Conjec=SFP
 「あのおじい³は誰が掃除したか知らないはずだ。」
- D. *mma=a* [*tau=ga=du* *saudzi si-taa*]=*titi=ja ssi=du*
 祖母=Top 誰=Nom=Foc 掃除 する-Past=Quot=Top 知る=Foc
uu=doo.
 Cont=SFP
 「おばあは誰が掃除したか知っている。」
- E. *ba=ja* [*tau=ga=du* *saudzi si-taa*]=*titi=ja ssi=du uu*.
 1Sg=Top 誰=Nom=Foc 掃除 する-Past=Quot=Top 知る=Foc Cont
 「私は誰が掃除したか知っている。」

この話者からは、D.E. に関して、「実は知ってるんですよという時には *du* を使う」という内省も得られた。また、この方言では5名の話者に対して聞き取り調査を行ったが、最も若い1951年生まれの話者にも同様の傾向が見られた。これらのことは、3節で見た *ga/du* の使い分けが伊良部集落方言に特有のものではないことを示している。

4.1.2. 下崎方言話者

この方言で調査したのは1943年生まれと比較的若い話者である。この方言話者は、(20)に示すように、埋め込み節の焦点部分に全て *du* を用い、*ga* を用いることはない。特に伊良部集落や新里集落と異なるのは、確信度が低いA.B.においても *ga* ではなく *du* を用いる点である。

- (20) A. [*taa=ga=du* *soot=tsu si-taa*]=*gara ssa-n=riba*.
 誰=Nom=Foc 掃除=Acc する-Past=Q 知る-Neg=SFP
 「(私は)誰が掃除したかしらない。」

- B. *sjuu=ja* [*taa=ga=du soot=tsu si-taa*]=*gara ssa-n=riiba*.
 祖父=Top 誰=Nom=Foc 掃除=Acc する-Past=Q 知る-Neg=SFP
 「おじいは誰が掃除したか知らない。」
- D. *odzii=ja* [*taa=ga=du soot=tsu si-taa*]=*gara ssi=du*
 祖父=Top 誰=Nom=Foc 掃除=Acc する-Past=Q 知る=Foc
uu=padzi=ja.
 Cont=Conjec=SFP
 「おじいは誰が掃除したか知っているはずだ。」
- E. *ba=ja* [*taa=ga=du soot=tsu si-taa*]=*ti ssi=du*
 1Sg=Top 誰=Nom=Foc 掃除=Acc する-Past=Quot 知る=Foc
uu=suga naraasa-dzjaan.
 Cont=Conces 教える-Neg.Vol
 「私は誰が掃除したか知っているけど、教えない。」

しかしこの方言は、後に見る狩俣方言などと違い、主節においては疑問詞疑問専用の *ga* を持っている。

- (21) *vva=a ndza=nkai=ga iki u-ta=rjaa?*
 2Sg=Top どこ=All=Foc 行く Cont-Past=SFP
 「あなたはどこに行っていたの？」

よって、この方言の *ga* は、主節にだけ使われるという特徴を持っている。その点で、*ga* の選択する文のタイプは伊良部集落方言や新里方言とは異なるが、特定の文のタイプ（主節）を選択している点で、*ga* が文全体への影響力を保っていると言え、係り結びは機能していると考えられる。このタイプの *ga* の分布は、与那覇方言話者（1935 年生まれ）にも見られた。

4.1.3. 上地方言話者

以上の二つのタイプの方言は、疑問詞疑問専用の係助詞 *ga* が疑問詞と異なる分布を示し、係助詞がある種の文のタイプを決定しているといえる。しかし、宮古語話者の中には、文のタイプに関係なく、疑問詞が使われれば必ず係助詞 *ga* を用いるといった文法を持つ話者もいる。次に挙げた 1939 年生まれの上地方言の話者がその例である。

- (22) A. *ba=ja* [*too=ga=ga soodzi si-taa*]=*gara ssa-n*.
 1Sg=Top 誰=Nom=Foc 掃除 する-Past=Q 知る-Neg
 「私は誰が掃除したか知らない。」
- B. *kanu sjuu=ja* [*too=ga=ga soodzi si-taa*]=*gara ssa-n*.
 Dem.Gen 祖父=Top 誰=Nom=Foc 掃除 する-Past=Q 知る-Neg
 「あのおじいは誰が掃除したか知らない。」

- C. *vva=a [too=ga=ga soodzi si-taa]=gara ssi=du uu=nuga?*
 2Sg=Top 誰=Nom=Foc 掃除 する-Past=Q 知る=Foc Cont=Q
 「あなたは誰が掃除したか知っている?」
- E. *ba=ja [too=ga=ga soodzi si-taa] kutu=uba ssi=du uu.*
 1Sg=Top 誰=Nom=Foc 掃除 する-Past こと=Acc.Top 知る=Foc Cont
 「私は誰が掃除したか知っている。」

この話者は主節でも疑問詞疑問には係助詞 *ga* を用いるが、埋め込み節で疑問詞があれば必ず *ga* を用いる。疑問詞と *ga* の分布が一致するので、文のタイプを決めているのは係助詞ではなく疑問詞であるとも考えられる。また、疑問詞疑問文では、焦点の位置は疑問詞の存在によって分かるので、*ga* が焦点の位置を示しているとも言い難い。だとすると、*ga* は単に疑問詞が現れれば使われるといったように、形骸化していると考えられる。このような *ga* の分布は、佐和田（1929 年生まれ）、荷川取（1944 年生まれ）の話者にも見られた。

4.1.4. 野原方言話者

上地方言話者の文法では、疑問詞と係助詞 *ga* の分布は一致するので、疑問詞があれば係助詞は不要であるとも言える。それでも上地方言の話者は、係助詞 *ga* を使用していたが、他の方言話者の中には *ga* を脱落させて文を発話する話者もいる。たとえば次の野原方言の話者（1948 年生まれ）がそうである。(23) に直接疑問、(24) に間接疑問の例を挙げる。これらの例に係助詞 *ga* は使われていない。

- (23) *vva=a ndza=nkai iki u-taa=rjaa?*
 2Sg=Top どこ=All 行く Cont=Past=Q?
 「あなたはどこに行っていたの?」
- (24) A. *ba=ja [too=ga soodzi si-taa]=gara ssa-n=juu.*
 1Sg=Top 誰=Nom 掃除 する-Past=Q 知る-Neg=SPF
 「私は誰が掃除したか知らない。」
- C. *[too=ga soodzi si-taa]=gara ssi uu=na?*
 誰=Nom 掃除 する-Past=Q 知る Cont=Q
 「(あなたは)誰が掃除したか知っているの?」
- E. *ba=ja [too=ga soodzi si-taa]=gara ssi=du uu.*
 1Sg=Top 誰=Nom 掃除 する-Past=Q 知る=Foc Cont
 「私は誰が掃除したか知っている。」

ただし、この方言に係助詞の *ga* が存在しないというわけではない。話者に確認すると、係助詞 *ga* を使う形も可能であるという回答が得られる。(23) なら 'ndza=nkai=ga(どこに)', (24) なら 'too=ga=ga(誰が)' という形である。しかし、そのような誘導なしで、日本語の文を訳してもらおうと、係助詞 *ga* は全く使われない。

つまり、係助詞が疑問詞と分布を共にし形骸化が起こっているため、脱落するのだと解釈される。他にも新城（1926年生まれ）、松原（1939年生まれ）の話者にも同様の傾向が見られた。

4.1.5. 狩俣方言

以上の方言は全て、その分布は異なるにしても、疑問詞疑問専用の *ga* を持つ方言である。これに対し、宮古本島北部や大神島、池間島の諸方言は疑問詞疑問専用の係助詞を持たない方言である。ここでは、宮古本島最北部の狩俣方言の例を挙げる。(25) が直接疑問、(26) が間接疑問の例である。

- (25) a. *ndza=ngi=du asubi ifu-tai?*
 どこ=Loc=Foc 遊ぶ 行く-Past
 「どこに遊びに行った？」
- b. *vva=a noo=ju=du jumi ui?*
 2Sg=Top 何=Acc=Foc 読む Cont
 「あなたは何を読んでいる？」
- (26) A. *ba=a [taa=du soodzi asi-tai]=gara ssa-n.*
 1Sg=Top 誰.Nom=Foc 掃除 する-Past=Q 知る-Neg
 「私は誰が掃除したか知らない。」
- B. *obaa=ja [taa=du soodzi asi-tai]=gara ssa-n=doori.*
 祖母=Top 誰.Nom=Foc 掃除 する-Past=Q 知る-Neg=Evid
 「おばあは誰が掃除したか知らないようだ。」
- D. *obaa=ja [taa=du soodzi asi-tai]=ttsi=ja ssi=du ui.*
 祖母=Top 誰.Nom=Foc 掃除 する-Past=Quot=Top 知る=Foc Cont
 「おばあは誰が掃除したか知っている。」

(26) のように、埋め込み節内で *du* が使われる点は、先に見た下崎方言話者と一致するが、この方言では、(25) のようにそもそも係助詞の *ga* を持たない。*du* は他の宮古諸方言と同じく平叙文にも用いられるので、係助詞によって文のタイプが決まるということは、この方言にはない。つまり、*du* は単に焦点を示すだけであり、形態的観点からも機能的観点からも、係り結びをこの方言に認めることはできない。

4.2. 係り結びの衰退

本節で見てきた宮古諸方言における係助詞 *ga* の分布の特徴を、それが使われる集落名とともに示すと次の表4のようになる。一人の話者からのみ調査した場合は〈 〉内に生年 (* 付きは調査時の年齢から推定) を示している。

表4 諸方言における *ga* の使用

	特徴	方言 (話者)
I	主節で <i>ga</i> , 埋め込み節で <i>ga/du</i>	伊良部, 新里
II	主節で <i>ga</i> , 埋め込み節で <i>du</i>	下崎 (1943), 与那覇 (1935)
III	主節も埋め込み節も <i>ga</i>	上地 (1939), 佐和田 (1929), 荷川取 (1944)
IV	主節も埋め込み節も <i>ga</i> が脱落	野原 (1948), 新城 (1926), 松原 (1939*), 洲鎌 (1952)
V	主節も埋め込み節も <i>du</i>	狩俣, 大神 (1923*), 島尻 (1937), 大浦 (1924*), 佐良浜 (1942)

係り結びの衰退は, I から IV や V へかけて進んでいると言える¹⁹。I, II の段階では, *ga* が特定の文のタイプで生起し, 文全体に影響力を与えている点で係り結びが生きている。しかし, *ga* の分布が疑問詞と一致する III では, 文のタイプが問題にならず, 係り結びの形骸化が起きている。その結果, 頻繁に *ga* を脱落させる IV のような係り結び消滅の一手前にある方言もあれば, 既に疑問専用の係助詞を失った V のような方言も存在する²⁰。

それでは I から V の分布には, 地理・系統的な説明が可能だろうか。まず確実に言えるのは, V のグループである。V のグループは宮古本島の北部の岬とその周辺の離島で話される方言であり, 地理的な近接性が見られる。これらは他の宮古諸方言と分岐したあと早くに, *ga* を失った可能性がある。しかし, 他のグループについては, 地理・系統的な説明は難しいように思われる。たとえば, 地理・系統的に近いはずの伊良部島の伊良部, 佐和田の方言は, それぞれ I, III に属している。また旧上野村の方言も新里が I に対して野原が IV の特徴を持つ。II に属している下崎, 与那覇の方言は地理的に決して近いわけではない。下崎は平良のやや北側で地理的には荷川取 (IV) に近く, 与那覇は旧下地町で上地 (III) や洲鎌 (IV) に近い。

表4の分布に説明が付くとすれば, むしろ世代によるものだろう。I, II に属している伊良部, 新里, 与那覇の話者は1920年代から30年代前半の話者である。

¹⁹ 査読者の一人から, 伊良部集落方言の埋め込み節における *ga* と *du* の併存は, *ga* の領域への *du* の侵入と解釈できるという趣旨の意見があった。たしかに表4は, 表面的には, 全て *ga* が使われる III から *du* の入り込んだ I を経て全て *du* となった V へと変化したと解釈できるように見える。しかし実際の言語使用においては, 係助詞は圧倒的に主節で使われ, 埋め込み節の分布は係助詞の機能の形骸化の指標として解釈した方が妥当であると考えられる。その点で, 機能による分担のある I よりも, 疑問詞と常に現れる III の方が形骸化が進んでいると解釈される。

²⁰ IV は現在変化が起ころつつある方言であり, V は既に変化が完了しているため, IV から V へという形で変化が進んでいるわけではない。V の方言は, IV の方言のような *ga* の脱落を経ずに, 形骸化した *ga* が *du* に置き換わったものと思われる。なお, IV のような方言と V のような方言の違いに関して, 査読者の一人から, 前者に主格の *ga* に焦点化の機能があるなど, 焦点化の方法に違いがないかという指摘を受けたが, これには IV の方言では *du* も落ちやすいのかを調査する必要がある, 結論は保留したい。

1940年代は前半の話者がII, IIIに属し、1940年代後半から50年代の話者がIVに分類される。しかし、1920年代に生まれてもIIIやIVの文法を持つ話者も存在し、話者の個人差が大ききことを伺わせる。危機言語においては、方言の習得に話者の個人差が大きく影響するため²¹、より大規模な調査がなされなければ、IからIVの特徴を世代による違いとして立証するのは難しいと思われる。

しかし、少なくとも、表4のようなバリエーションが存在することは、係り結びの定義、変化について、重要な示唆を与える。係り結びを形態的な観点から定義すれば、形態的呼応が失われた時点で変化は終りである²²。しかし実際には変化は終わっていないのである。たしかに、形態的呼応の喪失は、係り結びを機能的な観点から定義する立場からも、文全体への影響力の形態的実現を失うという意味で、衰退への大きな一歩である。しかし、変化はそこで終わるわけではなく、その後も文全体への影響力を低下させる形で係り結びが衰退していくことを、IからVのバリエーションは示しているのである。

5. さいごに

係助詞が疑問詞疑問文でのみ使われる場合、係助詞に文を疑問文化する機能があるのかどうかは一見分からない。この問題に対し、本稿では宮古語伊良部集落方言を取り上げ、疑問詞疑問専用の係助詞 *ga* の振る舞いを観察することで、文を疑問文化しているのは係助詞の *ga* であることを示した。すなわち、疑問詞は節の意味的な性質に関係なく使用されるのに対し、係助詞の *ga* は話し手が答えを知らないなど、疑問詞節に対する確信度が低い場合に使われる。この「答えを知らない」ということを疑問文の定義的性質とすると、*ga* が使われれば必ずその文は疑問文になるというように、*ga* に文の疑問文化の機能を認めることができる。

このような疑問文化の機能は、しかし、全ての宮古語話者に見られるわけではない。話者の中には、節の性質に関係なく、疑問詞が用いられれば *ga* を用いるといった文法を持つ話者もおり、また、そのような形骸化の結果、*ga* をほとんど使用しない話者もいた。本稿では、そのような形骸化は、若い話者ほど進んでいるのではないかと考えた。

²¹ 危機言語における話者の多様性については Grinevald and Bert (2011) を参照。また、岩崎・大野 (2013) は、個人の生育環境やライフスタイルが危機方言の習得に大きな影響を及ぼすことを指摘している。

²² 日本語の係り結びの衰退に関しては、「連体形終止の一般化」によってもたらされたとする考え方 (大野 1993, 『言語学大辞典』(三省堂) の「日本語」の項, 『日本語百科大事典』(大修館書店) の「文法の歴史的变化」の項など) が根強くある一方、係り結びの破格 (づがあっても連体形で結ばない, など) はそれ以前から甚だしく (阪倉 1993), 係り結びの衰退は連体形終止の一般化とは直接関係ないという主張も見られる (北原 1984, Hendriks 1998, 野村 2005)。しかし、いずれの立場でも、形態的呼応が失われた後、係り結びの衰退にどのような変化の段階があったのかを論じたものはほとんど見られない。また、野村 (2005) は疑問詞疑問専用のカガ、疑問詞があるために脱落したとするが、本稿のデータは、その脱落までに変化の段階があることを示していると言える。

宮古語は、係助詞と文末活用形との形態的な呼応がなく、他の琉球諸語と異なり係り結びがないと言われる。しかし、係り結びを形態的な呼応ではなく、文中の助詞が文のタイプを決めるという機能的な観点から定義すると、伊良部集落方言では係り結びが生きていることになる。それに対し、*ga* に疑問文形成の機能が認められない方言では、より係り結びの衰退が進んでいる。このように係り結びを機能的な観点も含めて考えることで、係り結び衰退のプロセスを、単なる形態的呼応の喪失ではなく、より動的な過程として捉えることが可能となる。

グロス略号一覧

1Sg 一人称単数	2Sg 二人称単数	Abl 奪格	Acc 対格	Acop 形容詞コピュラ
All 向格	Conces 譲歩	Cond 条件	Conjec 推量	Cop コピュラ
Cont 継続	Dat 与格	Dem 指示詞	Des 願望	Evid 証拠性
Foc 焦点	Gen 属格	Imp 命令	Loc 場所格	Neg 否定
Nom 主格	Past 過去	Pl 複数	Q 疑問	Quot 引用
SFP 終助詞	Top 主題	Vol 意志	= 接語境界	- 接辞境界

用例出典

万葉集, 源氏物語いずれも小学館『新編日本古典文学全集』

参 照 文 献

- Aso, Reiko (2010) Hateruma (Yaeyama Ryukyuan). In: Shimoji and Pellard (eds.) (2010), 189–227.
- 藤田保幸 (1997) 「従属句「～カ(ドウカ)」再考」『滋賀大学教育学部紀要 2 人文科学・社会科学』47: 1–10.
- 船城俊太郎 (1987) 「係結び」山口明穂編(編)『国文法講座 3 古典解釈と文法』287–306. 東京: 明治書院.
- Grinevald, Colette and Michel Bert (2011) Speakers and communities. In: Peter K. Austin and Julia Sallabank (eds.) *The Cambridge handbook of endangered languages*, 45–65. Cambridge: Cambridge University Press.
- 服部四郎 (1959) 『日本語の系統』東京: 岩波書店.
- Hendriks, Peter (1998) Kakari particles and the merger of the predicative and attributive forms in the Japanese verbal system. In: Noriko Akatsuka, Hajime Hoji, Shoichi Iwasaki and Susan Strauss (eds.) *Japanese/Korean linguistics 7*, 197–210. Stanford: CSLI.
- 平山輝男・大島一郎・中本正智 (1967) 『琉球先島方言の総合的研究』東京: 明治書院.
- 岩崎勝一・大野剛 (2013) 「宮古池間方言における言語衰退過程の考察—話者の体験談を通して—」田窪行則(編)『琉球列島の言語と文化—その記録と継承—』109–126. 東京: くろしお出版.
- 伊豆山敦子 (2002) 「琉球・八重山(石垣宮良)方言の文法」真田信治(編)『消滅に瀕した方言語法の緊急調査研究 (1) (『環太平洋の言語』成果報告書 A4-004)』343–461. 大阪: 大阪学院大学情報学部.
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一(編) (1997) 『言語学大辞典セレクション 日本列島の言語』東京: 三省堂.
- 狩俣繁久 (1997) 「宮古方言」亀井・河野・千野(編) (1997), 388–403.
- かりまたしげひさ (2011) 「琉球方言の焦点化助辞と文の通達的なタイプ」『日本語の研究』7(4): 69–82.

- Kinuhata, Tomohide (2012) Historical development from subjective to objective meaning: Evidence from the Japanese question particle *ka*. *Journal of pragmatics* 44(6-7): 798–814.
- 衣畑智秀 (2014) 「日本語疑問文の歴史変化—上代から中世—」青木博史・小柳智一・高山善行 (編) 『日本語文法史研究 2』 61–80. 東京：ひつじ書房.
- 北原保雄 (1984) 『文法的に考える—日本語の表現と文法—』 東京：大修館書店.
- 国立国語研究所 (編) (2002) 『沖縄語辞典』 (第9刷) 東京：財務省印刷局.
- 此島正年 (1966) 『国語助詞の研究—助詞史の素描—』 東京：桜楓社.
- Kuroda, S.-Y. (1979) *Generative grammatical studies in the Japanese language*. New York: Garland Publishing Company.
- 本居宣長 (1771) 『ひも鏡』 (大野晋・大久保正 (編) (1990) 『本居宣長全集 五』 東京：筑摩書房).
- 名嘉真三成 (1992) 『琉球方言の古層』 東京：第一書房.
- 中松竹雄 (1973) 『沖縄語の文法』 沖縄：沖縄言語文化研究所.
- Niinaga, Yuto (2010) Yuwan (Amami Ryukyuan). In: Shimoji and Pellard (eds.) (2010), 35–88.
- 野原三義 (1986) 『琉球方言助詞の研究』 東京：武蔵野書院.
- 野村剛史 (2005) 「中古係り結びの変容」『国語と国文学』 82(11): 36–46.
- 大槻文彦 (1897) 『広日本文典・同別記』 (東京：勉誠社より 1980 年に復刻).
- 大野晋 (1993) 『係り結びの研究』 東京：岩波書店.
- ペラール トマ (2012) 「日琉祖語の分岐年代」琉球諸語と古代日本語に関する比較言語学的研究ワークショップ口頭発表. 京都大学, 2012 年 2 月 20 日.
- 阪倉篤義 (1975) 『文章と表現』 東京：角川書店.
- 阪倉篤義 (1993) 『日本語表現の流れ』 東京：岩波書店.
- 柴田武 (1976) 「沖縄県平良市方言の付属語 *du* および *nu*, *ga* について」佐藤喜代治教授退官記念国語学論集刊行会 (編) 『佐藤喜代治教授退官記念国語学論集』 39–60. 東京：桜楓社.
- Shimoji, Michinori (2008) A grammar of Irabu, a southern Ryukyuan language. Unpublished doctoral dissertation, The Australian National University.
- 下地理則 (2009) 「南琉球宮古伊良部島方言の係り結び—共時的な記述」『琉球の方言』 33: 87–98.
- Shimoji, Michinori (2011) Quasi-kakarimusubi in Irabu. In: William McClure and Marcel den Dikken (eds.) *Japanese/Korean linguistics 18*, 114–125. Stanford: CSLI.
- Shimoji, Michinori and Thomas Pellard (eds.) (2010) *An introduction to Ryukyuan languages*. Tokyo: Research institute for languages and cultures of Asia and Africa.
- Shinzato, Rumiko and Leon Seram (2013) *Synchrony and diachrony of Okinawan kakari musubi in comparative perspective with Premodern Japanese*. Leiden: Global Oriental.
- Takubo, Yukinori and Yuka Hayashi (2010) Kakari-musubi in Ikema Ryukyuan. A presentation at the 20th Japanese/Korean linguistics conference. Oxford University, 2 October 2010.
- 富浜定吉 (2013) 『宮古伊良部方言辞典』 沖縄：沖縄タイムス社.
- 上村幸雄・須山名保子 (1997) 「奄美方言」亀井・河野・千野 (編) (1997), 431–459.
- 内間直仁 (1985) 「係り結びのかかりの弱まり—琉球方言の係り結びを中心に—」『沖縄文化研究』 11: 223–244.
- 山田孝雄 (1936) 『日本文法学概論』 東京：宝文館.

執筆者連絡先：

〒 814-0180 福岡県福岡市城南区七隈 8 丁目 19-1 [受領日 2015 年 4 月 30 日
福岡大学人文学部 最終原稿受理日 2016 年 2 月 9 日]
e-mail: tkinuhata@cis.fukuoka-u.ac.jp

Abstract***Kakari-musubi* of wh-questions in Miyako Ryukyuan:
Focusing on the Aza-Irabu Dialect**

TOMOHide KINUHATA

Fukuoka University

When a wh-word and the *kakari* particle marking questions coexist in a single sentence, it is not clear which makes the sentence interrogative. In this paper, I propose that in the Aza-Irabu dialect it is not the wh-word but the *kakari* particle *ga* that determines the sentence type. In this dialect, while the distribution of the *kakari* particle *ga* agrees with that of the wh-word in the unembedded context, the use of the former is more restricted than that of the latter in embedded questions: *ga* can only appear in an embedded clause whose answer the speaker or the subject is uncertain of. Given the speaker/subject's uncertainty as the definition of interrogatives, it is concluded that the *kakari* particle *ga* determines the sentence type. There are, however, some speakers of other varieties of Miyakoan who have lost this function of the *kakari* particle. This means that the decline of *kakari-musubi* proceeds from the loss of morphological concordance to the loss of the function of determining the sentence type.